

## 平成26年度岡山県子ども読書活動推進会議第2回会議議事概要

- 1 日 時 平成27年2月12日(木) 14:00～16:00
- 2 場 所 県庁南庁舎1階第3会議室
- 3 出席者 相賀委員、大村委員、岡武委員、黒田委員、白神委員、塚本委員、徳山委員、森本委員、湯澤委員  
藤井委員欠席 (五十音順) 出席9名 欠席1名 計10名

### 4 概 要

#### (1) 子ども読書活動について

事務局から資料により、第1回の読書推進会議について説明した後、各委員から御意見を頂いた。

(委 員) 前回の会議のまとめの説明だったが、前回欠席だった委員から、小学校の子どもたちの読書活動について御意見をいただきたい。

(委 員) 岡山県全体の姿として合っているかどうかはわからないが、確かに選書の力はない。自分の興味のある分野の本は読むが、読む本に偏りがある。男子であればギネスの本であったり、図鑑といった情報や絵の多い物を見て楽しんでいる。自分のテリトリーを決めてしまっている。自校は、国語の研究をしており、国語の授業で話を読んだ後、自分の読書活動につなげている。読書と国語の授業を結びつけた活動を行い、読書の幅を広げる機会となっているが、まだ研究段階であり、さらに力を伸ばしていきたい。

(委 員) 学校の中で、学校図書館の先生と担任の先生のつながりで課題やうまくいっていることはないか。

(委 員) 低学年は週に1時間、3年生以上は2週間に1回か3週間に2回程度、図書の前には、担任と司書で事前に相談して授業を行っており、学校図書館に預けっぱなしというわけではない。県北で司書のいない学校は、週1時間の図書の時間もないので、学校図書館の活用もあまりない。司書がいるのといないのでは大きく違ってくる。

(委 員) 今日の会議については、前半で資料提供、後半で今後の方策や取組について具体的な提案していただきたい。第3次計画が策定され施行されているが、それをいかにして活用していくかが次年度の課題になってくる。ここでの提案が即実施というわけではないが、第3次計画の推進に向けて多様な提案をしていただき、それぞれの立場の方々を取り入れることができるように具体的な情報発信をお願いしたい。

説明(事例の説明・紹介)

(委 員) これだけのことを行っているというのはすごいことである。どうや

ったら生徒を図書館に来てもらうようにするかが課題である。図書館へは来る子は来る、来ない子は来ない。来ない子の方が圧倒的に多いという状況で、来ない子をいかに来させるかということで、どの学校もいろいろ取り組んでいるところである。

- (委員) 図書館は生徒を読書活動につなぐための環境として、図書館の活性化の工夫が必要である。

説明 (おもしろ読書事典活用事例の説明・紹介)

(岡山県子ども読書活動推進連絡会について)

- (委員) 中高生の世代に関して、中高生の読書活動をいかに支援していくかという話を足がかりに、さらにその元となる、本との関わりが培われる幼少期から小学校期に何ができるかを振り返りながら、方策について話をしていきたい。子ども読書活動推進連絡会を振り返りながら、環境として図書館に現状と提供できる取組があればそこから話を進めていきたい。

- (委員) 自分は直に子どもと接することはあまりないのだが、読書活動推進連絡会で思ったこととして、子どもが図書館に来ない、読む必要感がない、読めないなど本から遠くなっていっている理由は何なのか考えていく必要があるということである。子どもたちの興味をいかに引きつけるかということが必要あり、どうやったら図書館にきてもらえるか、いかに本に触れる機会をつくるか、小中高のつなぎで必要なものは何なのかを考えたとき、ポイントは人である。人という最大の環境が大きく影響している。人がいかに本と子どもをつないでいくかを考えることが必要である。また、学校司書の苦勞として、なかなか来てもらえないというものがあり、来てくれたらいろいろできるのに、といった声もあがっている。

- (委員) 小中高のつながりという大切なキーワードが出てきたが、このことについてはどうか。

- (委員) 小中高で読書環境が切れないようにするためには、人がつないでいくという話の中で、自分が中学校体験入学の時に、中学校の図書館を見学し、司書の先生に声をかけてもらったことを思い出した。図書館は癒やしの空間であり、自分も本や図書館につないでもらった気がした。勉強だけでつなぐのではなく、読書や図書館でつながるというのもいいことである。

- (委員) 優秀実践校も同様の取組がある。中学校体験入学の貴重な1日の中で図書館が入ってくるというのは大変有効で、子どもたちの記憶としてしっかり残るものである。

- (委員) 小中学校の学校司書の立場が弱く、発言もしにくい。子どものために何かを始めようと思っても巻き込める先生がなかなかいない状況で

ある。学校長や市町村の教育委員会、岡山県教育委員会など、上からの指示があれば、動きやすいと言う司書もいた。

小学校・中学校・高校と切れ目がなく読書体験をつなげていくことが大切である。幼児期の読書体験は特に大切なので、図書館ではブックスタートや読み聞かせなどを行っている。

公共図書館は、小中学校とは関わる機会が多いが、高校と関わることは少ない。読書体験のつながりを途切れないようにしていくことは、自分たちの課題でもある。

(委員) 今日午前中、市内学校の新入生1日入学の中で、家庭教育事業を行った。こうした親育ちの観点でいろいろな取組を行っており、読書の大切さや読み聞かせの大切さにも触れている。保護者も読書の大切さはよくわかっているがなかなか難しいという話を聞く。

今日、午前中に行った事業会場は、学校図書館であったが、隔週で学校司書が入り、綺麗に整備され、子どもたちが利用しやすく、来くなるような環境作りの工夫がされていた。当市は司書の努力と地域のボランティアの方々の協力で学校の読書環境が整備されつつある。しかし、本を読まない、本に触れない保護者のところへつないでいくのは、まだまだであり、継続していく必要がある。

(委員) 保護者の家庭教育支援の会が学校図書館で行われたというのはとてもいいことである。保護者が図書館に身をおく機会がないので、たまたまであるかもしれないが、それはうまく働いたのではないか。

(委員) 自校のPTAの会議は、ほとんど図書館で行っている。幼時期の本好き本嫌いの二極化、高校生も同様ということで、このことに尽きるのではないか。読む子どもは放っておいても自分で読んでいます。

おもしろ読書事典の活用事例はどれもイベントっぽい物が多い。イベントがなくなれば来なくなるという懸念がある。活用事例の中には参加人数の少ないものもある。足を運ばない、活字を読まないそういった子どもたちをどうするかというのは大変難しい。活字の役目を終えてしまっているのかもしれないとさえ思える。今はスマホがあればそれで十分足りている。未読の子どもたちに対しての方策や取組は難しい。

(委員) イベントをしないと子どもが来ないというのは根本的に考え直さないといけない。本を読む生徒との関わりはどのようにしているのか。自分が職場で別の活動をしたとき、最初は読む子と読まない子という二極化が出てきたが、次第に、読む子が読まない子に対して働きかけをしており、その効果は大きい。よく読む生徒に対する関わり方が何かの糸口になったりしないか。

(委員) よく読む生徒には特に何もしていない。よく読む生徒は自分で読んでるので生徒が求めなければ逆効果になるのであえてしていない。生徒間の口コミがあり、おもしろい本など生徒同士で情報交換

している。ビブリオバトルなどイベントで取り上げられている本はしばらく貸し出され人気がある。読まない生徒は、何を讀んだらいいのかわからない。どういう本がおもしろく、どういう本がおすすめなのかなど何らかの紹介をすることは有効かと思う。

(委員) ビブリオバトルの実施はどのような状況か。

(委員) はじまったばかりの取組なので、ほとんど実施されていない。

(委員) 今後の取組と方策について、今まで提案や報告した内容で使えるものなどはないか。

(委員) 小中高の連携について話が出たが、市内の小中学校の先生と話をすることは有効である。実際に自分も市内の中学校の司書の方と話をして中学の頃の様子はどうだったか情報収集することは有効であった。図書館に来ない生徒を来させるようにするのは難しいという話が出たが、公共図書館に置き換えても同じで、一般の人も公共図書館に来ない人がほとんどである。児童生徒、特に高校生に意識改革をして、来させるのは難しいことである。公共図書館でも困り事があって図書館へ相談に来る人も結構いる。本当に困っている人にとって役に立つ図書館でありたい。実際に高校でも大学受験の際に、入試の課題について困ったときに図書館に来る生徒がいる。困ったときに図書館が役に立つ、助けてくれるということを知らせたい。困ったときに図書館が何とかしてくれるということすら知らない生徒もたくさんいる。そういった生徒たちに使ってもらえるような工夫を考えていきたい。

(委員) 学校の図書館も同じである。小学校の図書館も同様に、子どもは虫を捕まえた時もそのまま図書館へやってきて、何なのか調べようとしている。学校司書がいれば、何か調べたり助けてもらいたいときに、行けば助けてもらえるという意識で図書館を利用する子どもが増える。大人は文学を読むといった限られたイメージしか持っていないが、子どもたちが、早くから、図書館の利用の仕方や役割を学び、知っていれば、中学高校で図書館や読書から離れていてもまた戻ってくる。自分の娘も普段は行かないが、たまに図書館へ調べに行くことがある。図書館に行けば、どこに何があるかよく知っており、調べ物はどうにかなることを小学校の頃に学んでいる。小学校までにたたき込んでおかないと、中高生になったときに、図書館を利用しようとも思わないし、利用の仕方がわからない。一部の文学好きしか利用しないところになってしまうのではないか。

子どもを全員本好きにしたいのか、一定のレベルの活字を読める状態にしたいのか、委員の意識疎通を図る必要がある。

図書館は困ったときに利用できるということを知らせ、利用している姿を見せるというのが大人の役割ではないか。図書館に足を運ぶ生徒の少ない中学校で、各クラスに行って朝読書で本紹介をしてがんばっている学校司書もいる。高校の図書委員に展示コーナーを提供して

くれている公共図書館もある。大人は読書で子どもの活躍している場を知ってやる必要がある。

- (委員) 図書館が信頼されるためには、人は前提である。
- (委員) 分からないことがあって図書館に行ったのに、本ばかりで人がいなければ答えにたどり着かない。やはり、司書が必要で、いつも開いているということが大切。
- (委員) 司書の力量が大きい。新任の司書では十分に対応できない場合も多い。

(委員) 目指す司書像はどのようなものか？

(委員) 知識や引き出しが多い司書である。

(委員) 一緒に歩んでくれる司書。司書自身もわからないこともあると思うが、そんなときになんとか問題解決につなげようとしてくれる司書。

(委員) 実際に入試関係で困ったときに求めてくる本は、ほとんど学校図書館にはない。県立図書館やいろいろな図書館から取り寄せている。そういうスキルも必要である。

(委員) 小学校の時は、週1回図書の時間があるので、読まないかもしれないが、とりあえず1週間に1回本に触れている。もし本気で考えるなら、教育委員会で中学や高校も図書の時間を確保することが近道である。それが無理であれば、子どもの近くに本を置いてやる。そういう点で学級文庫や一斉読書が重要となる。中学校では一斉読書の成果が見えているので、高校も一斉読書を実施し、本を読む時間を確保してやる必要がある。高校生には、読む時間や読む機会がないので、そういった時間を確保してやるのが支援になるのでは。

小学校では、図書の時間は担任の先生も一緒にいって楽しんでいるようだが、本当はさらに一歩進んで、司書が各教科でも授業支援として関わることが望ましいがそれは難しいか。どの教科も本とつながりがあるはずなので、全教科の先生が少しでも本について話をしていく取組が必要である。各教科の先生が学校図書館に足を運んで、授業に関連する本の話をしたり、校長先生が朝礼の話の中で本について触れてみるなど、大人がいつでもどこでも本を利用して、本は役に立つと思わせるような取組が大切である。

(委員) 授業との関連性だけでなく、中高生は先生にあこがれている面がある。あこがれている先生が中学高校時代にどんな本を読んでいたのかということを知ることもありだと思う。紹介しても読む生徒は少ないかもしれないが、きっと読む生徒もいるだろう。大人も読むという点で姿勢だけでなく、何を読んだらよいか、いろいろなチャンネルで本を紹介していくことは良いことである。

では、中高生の土台となる小学校、幼稚園、保育園等の取組として、何かないだろうか。

(委員) 小学校は保護者との連携が必要である。小学校や幼稚園は目標とす

る姿は保護者である。家庭との連携が大切であり、小学校でもそういったことを呼びかけていくことが必要。自校では月に1回家読をし、生活習慣チェックを行い、その日はノーメディアにしている。全ての家庭でできているわけではないが、そういう取組を提案し、学校が投げかけることによって変わってくる。保護者からのコメントが寄せられ、そのコメントを図書館便り等でも紹介している。家読がある場合、それを意識して選書する児童も出てきている。

選書は、高学年は自分で行き、低学年は司書や担任が紹介や支援をしている。読み方は、いろいろで家族に読んでもらったり、家族に読んであげたり、一緒に読んだりしている。普段と家読の時とでは、子どものモチベーションは違ってきている。

(委員) 読み切ったという経験が必要であるが、子どもの中で読み切ったという経験につながっていくような取組など何かないか。

(委員) 自分は大学以降から本の楽しさを知った。1冊読み切るというのは、楽しかったおもしろかったという実感ではないか。そういった経験をいかにさせてやるかが重要である。自分が小学校教員の時、学級文庫に力を入れ充実させたが、1つ足りなかったのは、紹介しなかったところである。読んでもらいたいというこちらの思いを伝えたり、知らせたり読むきっかけを作ってやる必要がある。

学校の先生は忙しく、難しいのはよくわかるが、図書館の研修の立場から、子どもたちの最も近くにいる担任の先生に良い事例や取組などを知ってもらい、いかに意識してもらえるかが重要であると思う。研修について、子どもに関わるより多くの先生に知ってもらうきっかけを作っていく必要がある。研修の回数や内容等を確認し、今後の研修のあり方を考えていきたい。

また、司書の立場が弱いのはよくわかる。学校司書が学校で発言する機会がないため、学校司書がいかに学校の中に入っていけるかということが大切である。人をいかに育てるかという工夫が必要であり、その結果が子どもたちに反映する。また、本の持つ力を保護者や先生に聞いて欲しい。PTAの方でも、学級文庫の充実など環境作りの組織的な面でのバックアップが必要である。学校長をはじめいろいろな方々の理解とその啓発について考えていきたい。

(委員) 本と子どもをうまくつないでいく上で鍵となるのは先生である。また、本の大切さを親たちが認識することも必要である。子どもの頃に読んだ本をもう一度読むこともいいのではないか。読むときの視点が大人になり、感じ方が変わる。親が再び本に出会えるような環境が作られる、そういう仕掛けも考えられるといい。

今まで話をしてきた学校・公共図書館から家庭・幼稚園・保育園へ目を向け、土台となる乳幼児期についてどうだろうか。

(委員) 前回、好きと嫌いの二極化があると言ったが、それをそのままにし

ておくのは良くない。専門家である先生が、あまり本を知らない。題名は知っているが、子どもの育ちに即した本を知らないので、先生自身が、本を知る・楽しむ、子どもの育ちについてどういう子どもを育てたいのか等、研修で学んでいきたい。

保護者も、本当は本を読んでやる時間を持ちたい、子どもにふれあいたいと思っているが、それができなかつたときに怒ったり落ち込んだりすることになる。そういった保護者へは園に来たときに、本を読んでいる子どもの姿を見て、生活に結びつけて本を紹介している。保護者には、子どもにじっくりと関わって欲しい。子どもは本から多様な本の楽しみ方を見いだすことができる。子どもの世界に入っていないといけないうし、お母さんにそういった時間を生み出してもらい、じっくり関わってほしい。お母さんが本好きになると、子どもも変わってきて肯定的になっている。子どもに対してしっかりした経験を大切にしていくと共に、お母さんに対しての支援やアプローチが必要となる。

当市でも活字離れが進んでいて、乳幼児期からの支援をどうしていけばいいかというリーフレットを作成したので、読んでみて欲しい。

(委員) みんな本好き、幼稚園や保育園で読み聞かせをされていて本を嫌いという子はいない。元々、本が好きの子たちがなぜどこで本嫌いになるか疑問である。そういった点を考えたとき、お母さんや先生の研修などで改善していくということが鍵となり糸口になってくるのではないか。なぜ、子どもたちは本嫌いになったのだろうか。

(委員) 活字を読む練習ができていないからである。読み聞かせは浸透してきて、どこでもしているのだから聞くことはできているが、いざ自分で読むとなると難しい。読み聞かせと平行して自分で活字を追う練習が必要である。子どもたちが、活字に目覚めたときに、大人は、子どもたちに上手に活字や文字のおもしろさを伝え、読み聞かせと平行して自分で読むきっかけを作ることが必要である。

低学年で聞くことと読むことを同じくらいこなし、中学年くらいでシリーズものを中心に、楽しく読む練習をする。しっかり鍛錬をしておき、高学年では自分の興味にあわせて活字を追うことが苦ではない、読むことが苦にならないようにしておく。小学校でいかに楽しく読む練習をさせるかによって活字離れになるかならないか、違ってくる。読書をするための技術や体力、手法などを小学校の段階でしっかりと身につけさせなければならない。

(委員) 小学校への移行の際、いかに楽しく読めるかという点で失敗してしまっている。読み聞かせを寝かせるための道具として行っている場合もあり、ゆったりした時間が持てていない家庭も多い。ゆったりと自分が読みたくなるというところと、自分が読むことができるようになるというところの兼ね合いをうまくつなげていけたらよい。読まない

のか読めないのか、といった点で、支援の具体的な手だてがあるとよい。学校・家庭・その他の地域に関して、それぞれの立場から補足的な提案は何かないか。

(委員) 読み聞かせが盛んであるとの話であるが、その通りである。幼保小中、当市では多くの学校で行われており、読み聞かせを受ける環境は充実している。しかし、当市の調査では、親が毎日読み聞かせをしているとの回答は、5年前と比べ半分に減少している。逆にほぼしていないという回答は3倍近く増えている。いろいろな人が読み聞かせをしてはいるが、1番大切な幼児期の部分で、本を通じた親子の関わりが今ひとつである。本を通じたコミュニケーションやスキンシップについて何かアプローチを考える必要がある。

おもしろ読書事典は、小・中学校を対象とした取組で、2年間行ってきた事業なので成果も出てきているようである。ここで、まだ手が出せていない幼児期などは重要なポイントであり、家庭へのアプローチも考えていく必要があるのではないか。

地域のボランティアは盛んであるが、公立の図書館の元気がない。ボランティアの方と協働を行ってはいるが、地域の拠点施設としての図書館の魅力づくりも必要となってくる。

(委員) スマホの普及が親子関係や家庭に大きく影響してきているようである。社会が変わってきているので、取組や方策もそれに合わせて提案し実現していくということが、子どもたちを育てていく上で大人たちに求められているのではないか。

(委員) 県立図書館の資料費の見直しで減ることとなるようである。減額するということは、公共図書館だけでなく高校の図書館でも安心してサービスすることが出来ない。基金だけでは難しいので、一般財源化で県立図書館の資料費の財源を確保して欲しい。子ども読書活動にも不可欠である。

(委員) 県立図書館は非常に宣伝がうまい。本来、他の公共図書館の応援施設であるはずが、地方の人が地元の図書館は利用せず、県立図書館を利用したり、返却が遅れている方への督促状等の面での経費がかかっているらしい。他の図書館も宣伝上手になってほしい。地方の人が県立図書館を利用することは悪いことではないが、地元の図書館を大切にし、地元の図書館の活性化が一番であるので、図書館の利用の仕方を考えていかないといけない。

家庭が大切ということはわかっているが、親に言っても難しい世の中になっている。学校や園でなど身近な大人が支援していかないと、成果は出てこない。本来保護者がすべきことではあるが、家庭にだけ期待しても無理である。

(委員) 学校や園に負担がかからないかたちで、親や子どもに啓発できるような方法が一番良い。負担感が増すと逆効果になるので、そういった



かたちでアプローチできるように考えていかないといけない。

(委員) 学校の先生も本のプロではないので、学校司書など本のプロが伝授し、連携して取り組むことが大切である。以前、ある学校の先生に本を読むか質問したときに、「本は読まない」と断言した先生がいたが、そんなことはなく、何か本は読んでいるはずである。その先生の“本”はきっと文学に限っていたのだろう。大人や先生の固定観念や意識改革をしてほしい。

(委員) 幼稚園や保育園の果たす役割として子育て支援は大きな柱であるので、そこが模範となり、そこからなかなか本にアクセスできない家庭について、各家庭の事情を鑑みながら、先生が家庭とつながっていくことは大切である。予算・人・人の活用の仕方・研修など具体的な提案があった。これから、この提案をどのように吸い上げて具体化させていくかは来年度以降の話になってくる。この会だけでなく、ここで得た情報を広く発信しながら、今後それぞれの立場で具体的な取組としてつないでほしい。